

【同世代の山中先生に一步でも近づきたい“永遠の偽善者”】

小野田真由美 介護施設勤務

「信じられな〜い！」。これは、高校2年生の私が HIV について学んでいた保健体育の授業で発した一言です。この日、地元のテレビ局が私たちのクラスにインタビュー取材に来ていました。担当の記者から、「アフリカで暮らすあなたと同じ歳の女性がエイズになりました。どう思いますか？」と聞かれた私の口から出たのが冒頭の答え。きちんと答えるクラスメイトたちに対し、私はなんと情けないことか…。穴があったら今でも入りたいような経験。しかしこれが、その後の私を大きく変えるきっかけになりました。世の中を少しでも知って考え、伝えられる“ジャーナリスト”になりたい。その夢の入り口となったのです。

NHK のリポーターとして、名古屋・京都・大阪を拠点に東奔西走した 20 年間。同世代の山中先生が、HIV 感染率 42% の社会など地球を舞台に飛び回っていらっしゃる頃、私はローカルに密着して仕事をしてきました。震災や臓器移植などの取材を通して出会った、多くの「助けて」の声。自分の“役割”に精一杯向き合ってきたつもりですが、果たして私は、覚悟を持って堂々と“永遠の偽善者”と言いきれるほどの働きをしてきたのか。どれだけの痛みを解消し、笑顔を生むことができたのか。山中先生の“あたりまえの幸せに寄り添い”“絶対に苦しませない”仕事の証左は、しろひげ在宅診療所の患者さんや看取り・職員の右肩上がりの数字に克明に表れています。では、私自身は…？

いま勤務している認知症グループホームは、利用者様全員のお看取りをしています。医療や介護の技術や知識がなく、未だ現場で“役割”を見つけようとしている私にとって、今夜は雷に打たれるような衝撃＝最高のエールをいただきました。

「治療の専門家は、その人の人生を幸せにする専門家ではない」。これからの私は、一つ屋根の下で暮らす皆さんの心に寄り添える介護者でありたい。そして、生まれた時と同じように、ご本人とご家族にとっての最期が“喜ばれる命”＝しあわせな死となる場作りをしていきたいという目標が明確になりました。

毎日がスペシャルな、命の現場。山中先生から受け取った優しさのバトンを、私たちの施設に、そして地域につなげていきたいと思います。今夜は、どのお話も取りこぼしたくないと必死で両手を広げているような 3 時間でした。

素晴らしいえにしを、ありがとうございました。